取材日：2017年11月30日

Community Medicine CM
地域医療

湖南医療圏
（草津市周辺）

# 地域医療支援病院として連携を推進し、急性期医療から地域包括ケア、予防医療まで。

## Point of View

① 多数の医療スタッフが糖尿病チームのメンバーであるとの意識を持って患者とかかわる
② 2人主治医制を提唱するとともに開放型病床を備え、地域の診療所の医師たちと密な連携体制を構築
③ ケアミックス型病院として回復期、慢性期の機能も強化し、在宅医療への移行をサポート

社会医療法人誠光会 草津総合病院 理事長 柏木 厚典先生
社会医療法人誠光会 草津総合病院 病院長 平野 正満先生
社会医療法人誠光会 草津総合病院 糖尿病・内分泌内科部長 巌西 真規先生
橋本内科医院 院長 橋本 賢治先生
社会医療法人誠光会 草津総合病院 慢性疾患看護専門看護師 伊波 早苗氏

### 全国でも稀な人口増加地域で将来を見据えた施策を推進

草津総合病院が立地する滋賀県草津市は、ある経済誌が調査した「住みよさランキング」近畿ブロックで２年連続No.１を誇る人気の町。同院理事長の柏木先生が語る。

「適度に都市化される一方で自然環境に恵まれ、京都、大阪に近い利便性が評価されているのでしょう、草津市を中心とした地域の人口は増加し続けています。

当院がカバーするのは、そうした草津市と、隣接する大津市瀬田周辺までを合わせた人口約200,000人のエリアです」（柏木先生）

では、人口増加傾向が顕著な草津市にある同院の課題とは何か。

「人口が増えれば当然、病気を持つ人も増えます。しかも、比較的若い世代の流入が多いので、ほかの地域よりやや遅れるものの2010年以降、急速に高齢化が進むとともに当院では、2025年には外来患者が20%、入院患者が40%増加すると予測しています」（柏木先生）

「しかし、県下第２位の人口規模の中核都市にもかかわらず、草津市には公的な病院がありません」と同院病院長の平野先生が話を続ける。

「そのため、当院が中心的な存在となり、地域の医療を支えていかなければならないのです」（平野先生）

確かに同院は、2008年に社会医療法人の認定を受け、2013年には地域

左から柏木先生、平野先生、巌西先生、橋本先生、伊波氏

医療支援病院に承認されている。民間病院でありながら地域全体を見渡した医療構想を求められる立場にあるのだ。

「そこで、人口増加、高齢化に対応するために何をすべきなのか考えた結果、重要な３つの施策が浮かび上がってきました。

ひとつ目は、糖尿病の重症化予防対策です。当院の入院患者の主疾患を見ると、脳血管障害、骨折、心筋梗塞、糖尿病、悪性腫瘍が上位を占め、さらに糖尿病は、脳血管障害や心筋梗塞、最近は悪性腫瘍との関係も指摘され、同疾患の重症化予防の意義が増しています。

２つ目は、病診連携と地域包括ケアシステムまでを視野に入れた病院機能の強化。そして３つ目が、健康寿命の延伸のための予防医療です」（柏木先生）

## 多職種スタッフが参加する糖尿病チームの多彩な活動

まず、ひとつ目の施策である糖尿病重症化予防対策について、同院糖尿病・内分泌内科部長の巌西先生に聞いた。

「この３年ほどの間に糖尿病チーム（【資料１】）が充実し、チーム医療がしっかりと実践できるようになってきました。現在は、糖尿病専門医３名と慢性疾患看護専門看護師１名、糖尿病療養指導士（CDE）の資格を持つ看護師、薬剤師、管理栄養士、理学療法士など13名を中心に患者さんの療養指導と医療スタッフのさらなる教育を進めているところです」（巌西先生）

症例データの集積、解析についても充実する方向にあると言う。

【資料1】 糖尿病チームのメンバー

「2010年ごろからデータを集め出して、2017年からは糖尿病データマネジメント研究会（JDDM）に参加し始めました。今は、『CoDic』と称する糖尿病データの管理ソフトウェアを利用しています。

このソフトウェアでのデータベース構築と解析により、当院の患者さんにおける全体像や個々の病態、治療歴などを共有できるようになりました。

もちろん、それらを治療の質向上に活用しています」（巌西先生）

たとえば、患者個々の症状に合う薬物療法を追究していく中で、低血糖症のリスクが指摘されている血糖降下剤の使用が減少し、安全かつ良好な血糖コントロールを維持できる症例が増えた。

「医師と看護師、薬剤師のチームがデータを見ながら病棟回診を行い、変化があればすぐに介入を検討します。これなどは、チーム医療の体制と、データ集積・解析の、両方を充実できたことによる成果と言えるでしょう」（巌西先生）

糖尿病チームについては、慢性疾患看護専門看護師の伊波氏が説明を加えてくれた。

「巌西先生のお話にあったように、糖尿病チームのコアメンバーは、糖尿病・内分泌内科常勤医師７名、専門看護師とCDE認定取得者ですが、それ以外のスタッフに関しても、多くが糖尿病チームのメンバーであるとの意識を持って活動してくれています」（伊波氏）

院内で毎月開催される『糖尿病教室』は、糖尿病チームのメンバーが持ちまわりで担当し、毎回30～50名の参加を見る盛況ぶりだという。

「ほかにも世界糖尿病デー（【資料２】）のようなイベントの際には、各職種がテーマを決め、それぞれの視点から啓発活動を行っています」（伊波氏）

多職種が積極的に参加するチーム医療が発展し糖尿病・内分泌内科では、フットケア外来（【資料３】）やコントロール不良者に対して積極的に生活指導を行う糖尿病療養指導

外来（【資料４】）、持続血糖測定（CGM）外来、BMI35kg／m²以上の患者に対して内視鏡下の胃バイパス術によるメタボリック外科治療を消化器外科医師と連携して行う高度肥満糖尿病管理外来など、新たな専門外来が誕生した。結果、治療困難例でも糖尿病が寛解する症例が出始めている。さらに糖尿病チームは、診療科の枠を越え、糖尿病重症化予防にも取り組む。

「入院患者の大半は高齢者ですのでどんな疾患であっても、糖尿病の合併は珍しくありません。

また、先ほど柏木先生が指摘されましたが、糖尿病は脳血管障害や心筋梗塞などの血管疾患と密接にかかわるだけでなく、最近は、悪性腫瘍や認知症を合併する患者も多く、大きな問題となっています。そこで、専門や診療科の壁を越えた糖尿病の重症化予防と合併症の予防も急性期医療を担う当院の重要な使命のひとつと位置づけ、取り組みを強化しています。

その効果は、確実に上がりつつあり、糖尿病チームの介入で血糖コントロールを良好に改善できた脳卒中患者では、再発するケースがきわめて少なくなりました。

また、重症糖尿病網膜症を合併する症例は、ほとんどが治療中断者あるいは未治療患者で、定期的な受診者では予防できるようになっています」（巌西先生）

## 診療所の医師を大切に 2人主治医制、開放型病床も

「とはいえ、糖尿病を診る医師の数は十分でなく、増大する糖尿病医療のニーズに応えるには、地域のかかりつけ医の先生方と連携して診療することが不可欠です」（巌西先生）

前述のとおり病診連携は、糖尿病・内分泌内科に限らず同院あげての重点施策のひとつである。

「地域に密着した総合病院としてめざしているのは、地域完結型医療の展開です。そのために病院と診療所の医師による２人主治医制を大いにキャンペーンし、開放型病床を設けて、目に見えるかたちで２人主治医制を実践しています。

また、地域医療支援病院には、地域の医療関係者に対して研修の機会を設ける義務がありますが、当院では規定の倍の年間24回、延べ1,000名以上を対象に研修会を実施しています」（平野先生）

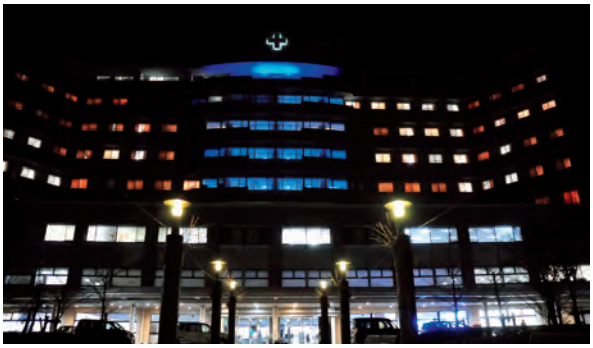
こうした同院と地域の診療所の相互の取り組みにより、同院の紹介率は80％以上、逆紹介率は60％以上に達する。同院との連携について、橋本内科医院院長の橋本先生は言う。

「さまざまな分野の専門医がいて高度先進医療を含めた専門的な治療を提供する草津総合病院は、地域のかかりつけ医にとって非常に心強い存在です。しかも、『病状が落ち着いているときは、診療所で診てください。しかし、悪化したらいつでも当院で診ます』と積極的に２人主治医制を掲げてくれているので、患者さんだけでなく私たち医師も安心して紹介し、また逆紹介を受け入れられます」（橋本先生）

専門が循環器内科の橋本先生の場合、経皮的冠動脈形成術（PCI）などの治療を草津総合病院に依頼すると、「次は６ヵ月後に当院で受診をさせてください」といった指示とともに患者さんが戻ってくる。

「悪性腫瘍に関しても、手術や化学

【資料2】 世界糖尿病デーのライトアップイベント



世界糖尿病デーに関するイベントの一環として、病院建物を糖尿病啓発のシンボルカラーであるブルーでライトアップした。

【資料3】 フットケア外来

【資料4】
「糖尿病療養指導外来」の患者向けフライヤー

糖尿病療養指導外来開設のお知らせ

糖尿病の相談ができる外来がはじまります

専門の研修を受けた看護師が、患者さんの不安や疑問を解消するお手伝いをさせていただきます。

- 合併症の状態が気になる
- これからの治療について心配ごとがある
- 糖尿病や合併症の進行を止める方法を知りたい

など、どうしたら無理なくできるか相談にのらせていただきます。ぜひ療養指導外来をご活用ください。

外来実施日
月・水曜日　9：00～12：30（1回　20～30分）

予約方法
外来主治医に受診希望をお伝えください。

担当者
糖尿病の専門研修を終えている看護師　竹嶋、神田、伊波

費用
指導は無料です。
ただし、今までと変わらずインスリン導入指導の場合は指導料がかかります。

実施内容
・糖尿病という病気や合併症についての説明
・ご自分の合併症や病気の状態についての説明
・合併症進行の予防方法についての説明
・生活相談
・薬や注射についての相談
・食事の摂り方についての相談
・運動の方法についての相談
・血糖コントロールや困っていることの相談　など

療法、放射線治療など高度な治療は草津総合病院にお任せしますが、経過を見守るのは私の務めです。役割分担によって、非専門の分野でも私が主治医でいられる。これは、地域で診療する身にとって、たいへんうれしいことです。

また、糖尿病も病診連携の必要性を強く感じる疾患のひとつです。２人主治医制のかかりつけ医として患者さんを診ていますが、困ったときは巌西先生に電話で相談をしたり、アドバイスをいただけるので、安心して診察ができます」（橋本先生）

「診療所の先生方からのお電話は、たとえ外来診察中でも必ず受けるようにしています。緊急性が高い場合や、重要なご相談に違いありませんから。

診療所の先生方には、当科外来だけでなく、糖尿病チーム医療から派生した各種専門外来や腎不全の治療をする透析センターなど、さまざまな施設やスタッフたちを存分に活用していただきたいと思っています」（巌西先生）

双方の信頼関係にもとづいた病診連携、地域に対してオープンな姿勢は、草津総合病院の特色と言えるまでに育っている。

## 県下第2位の病床規模でケアミックス型を実現

「草津総合病院は、急性期の治療後に退院困難な患者さんの受け皿も備えてくれています。『環境が整ったら在宅へ。そして、診療所で診てください』というシステムは、他の診療所の先生方も皆さん歓迎しています」（橋本先生）

「現在の当院の病床内訳は、高度急性期16床、急性期355床、回復期リハビリ41床、地域包括ケア108床、医療療養99床、介護療養100床。県下第２位の719床（うち開放型12床）の医療機関で、ケアミックス型を実現しているのです。

当院の地域包括ケア病床は、2014年７月にスタートしました。高齢化が進めば、同時に多疾患を抱える患者さんが増え、十分なリハビリ期間がなければ在宅に移行できないケースも多くなります。医療と介護のシームレスな連携のニーズは今後、さらに高まるでしょう」（平野先生）

草津総合病院は、腹膜播種センターや頭頸部外科のマイクロサージェリーをはじめとする先進的な高度医療を実践しながら、回復期や慢性期の患者の受け皿を確保し、さらには介護へのアクセスもしっかりと担うことで、地域医療に大きな貢献を果たしている。

「２つ目の施策である、病診連携と地域包括ケアシステムまでを視野に入れた病院機能の強化も、着実に達成の階段を上がっていると感じています」（柏木先生）

## 未病のケアまでをも念頭に置いた医療の展開を

３つ目の施策である健康寿命延伸のための予防医療は、今後の課題だとのことだが、すでに具体的なかたちは見えているようだ。

「まだ構想段階ですが、『心身健康道場』と称する予防医療啓発の場を地域に設けて、診療所の先生方とともに活動を展開できればと考えています。

私の専門の糖尿病、動脈硬化症、肥満症は、いずれも生活習慣の改善によって予防できる可能性が高い疾患です。個人の加齢や社会の高齢化は止めようがありませんが、いわゆる未病のレベルで、正しい食事や運動を習慣化すると同時に心のケアができる場があれば、多くの生活習慣病や認知症を予防し、健康寿命を延ばせるはずです。

地域住民の健康を守るには、未病のケアまでをも念頭に置いた医療を展開していく覚悟が必要でしょう」（柏木先生）

草津市が近畿地方で「住みよさランキング」No.１とされる要因には、草津総合病院の存在と、この地域の医師たちの将来を見据える真摯な姿勢もあるのではないか。そう思わせてくれる同院理事長の言葉だった。


社会医療法人誠光会
草津総合病院

〒525-8585
滋賀県草津市矢橋町1660
TEL：077-563-8866

橋本内科医院

〒525-0022
滋賀県草津市川原町302-5
TEL：077-564-1566